

公園での トラブル

ハンターは深く息をすいきみしました。「そんな言葉は言わないよ。」

ダイアナ・エブリン・ニールソン
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話は、アメリカ合衆国での出来事です。

ハンターは友達と一緒に公園を走って横切りました。風を切るのを感じて、にっこりと笑いました。自分はとても速くて軽いと思いました!

最初にフェンスにタッチしたのは、カイルで、「ぼくの勝ち!」とさげびました。

そのすぐ後に、ハンターがフェンスにたどり着きました。「ずるいよ! 先に走り始めたじゃないか。」

「そうだよ」とミゲルが言いました。「やり直し! あの木まで競争だ!」

ハンターはまた走り始めました。今度は、一番に木にタッチしました。でも、ミゲルがすぐ後ろにいました。



「ぼくの勝ちだ!」ミゲルが言いました。
「ちがうよ、ハンターの勝ちでしょ」とパイパーが言いました。
「そうだよ」とカイルが言います。
ミゲルはうでを組むと、悪い言葉を言いました。
ほかの子たちは笑いました。ミゲルがもう一度その言葉を言うと、みんなはさらに笑います。

ハンターは悲しくなりました。彼は、その言葉が良くない言葉だということを知っていました。でも、からかわれたくないので、何も言いませんでした。

パイパーが別の悪い言葉を言いました。すると、カイルもまた、別の悪い言葉を言いました。

「ハンター、次はきみが言いなよ」とカイルが言いました。

「そうだ、言いなよ」とミゲルが言いました。「ほかのきたない言葉を言ってみてよ。」

ハンターは深く息をすいきみしました。「そんな言葉は言わないよ。」

「一つ言うくらい、何も問題はないさ」とカイルが言いました。

「言いたくないんだ」とハンターは言いました。

「かわいいのか?」ミゲルが笑いました。

ハンターは、顔が熱くなりました。「ぼくは、別の場所で遊ぶよ。」

ほかの子供たちは、まだ笑ったり、悪い言葉を言ったりしていました。ハンターはにげ出したいくなりました。公園はもう楽しくありません。「またね」とつぶやきました。

ハンターはポケットに手を入れて、ほかの子供たちの間をゆっくりと通りすぎました。もう速くも軽くも感じません。心がひどく重く感じます。

ハンターはお母さんとお父さんがベンチに座っているのを見つけました。お父さんは本を置くと、「大丈夫?」と声をかけました。

ハンターはかたをすくめました。「みんなが悪い言葉を言い始めたんだ。ぼくは言いたくなかったから、帰って来た。」

お母さんがにっこりとわらいました。「それは勇気のいることだったわね。」

「ハンターのことをほこりに思うよ」とお父さんが言いました。「周りの人がそうしないときに、良い選択をするのはむしろか



しいことだね。」

ハンターはため息をつきました。正しい選択をしたことはうれしかったのですが、それでもまだ良い気持ちはしませんでした。

「家に帰りたい?」とお母さんがたずねました。

ハンターは考えてみました。「まだいいや」と言って、ジップラインで遊んでいる別の子供たちを見渡しました。「あっちへ行くよ。」

ハンターが歩いて行くと、一人の男の子が彼に手をふりました。「やあ、ぼくはデビッド。」

「ぼくはハンター。一緒に乗ってもいい?」

「もちろんいいよ!」

ハンターはジップラインに乗ると、自分が風を切って進んでいるのが分かりました。デビッドやそのほかの子供たちと遊ぶうちに、ハンターはまた、自分が速くて軽くなったような気がしました。ハンターは、難しいけれど正しいことをしたのです。良いことを選んでよかったと、ハンターは思いました。●

良い選択をすることについてさらに学ぶには、「子供のガイドブック」のうらにある「わたしの福音の標準」を読んでください。